

# 高山寺蔵釈迦如来念誦次第の仮名訓について

金子 彰

## はじめに

京都梶尾の高山寺に所蔵されている漢文体の釈迦如来念誦次第は、仏書解説辞典等にもその名が見られず、今後の研究が待たれる貴重な文献である。鎌倉時代に高山寺に於て作成されたであろうと推定される本書の先行研究は管見に入っていない。前稿<sup>注1</sup>に於て本書の書誌の略紹介を行って、その構成や本文について略説した。現存する八本の漢文の本文は基本的に共通しており相違点も少ない。但し、本書中に見られる多くの仮名訓には少なからず異

同が見られ、現存の八本は仮名訓を基準とすれば大きく二系統に分類されるであろうと報告した。しかし、仮名訓そのものの実態記述はしておらず、本稿では、以下、二系統のそれぞれの最古写本と見られる二本<sup>注2</sup>を取りあげてその仮名訓を検討してみたい。

(但し、本稿では、本文中の陀羅尼は考察の対照から外した。)本研究の目的のひとつが、高山寺旧蔵で天理図書館現蔵の全文仮名

書きの「シヤカニヨライネンシユシタイ」<sup>注3</sup>との比較を通して、漢文体と仮名書き体との変換に見られる言語特質を探ってみたいところにもあるからである。本稿はその前提作業として、漢文文献の仮名訓の状況を整理しておきたいと思う。

## 一 仮名訓の状況

取り上げる二系統の文献は以下のものである。第四部七五函28号と、第四部七五函43号とである。(以下、28号・43号と略称する。)

次掲の如く本書の冒頭部分の仮名訓から、28号と43号共にほぼ共通する訓読が行われている状況が窺われる。この冒頭部分の訓読の一致度から見て、それぞれの二系統と見られる28号、43号は同一祖本を持ち共にそれを移点したものか、或は28号又は43号の一方が一方を移点したものかと類推させる程類似している。但し、訓読方法は同様であっても、仮名訓の付訓方法には少なからず相

違が見られる。例を掲げてみる。(28号——43号、以下同じ)

2 四部七五函28号

1才1 釋迦如来念誦次第

- 2 先普礼 對 本尊前 端身正立
- 3 金剛合掌 閉目運 心想 對 本尊
- 4 并 曼荼羅海會聖衆 五鉢投
- 5 地恭敬 作禮 真言曰

(陀羅尼二行略)

8 次着座

1ウ1 次塗香 以白檀香等 塗 兩手

2 腕臂等想 磨 五分法身

3 次淨三業 蓮華合掌 印 五

4 處 五處者 先額 次右肩 即誦

兩本共に、一漢字に完全付訓されたもので、而も同一仮名訓のものは次の5語のみであり、他は次掲の如く仮名訓の付訓形式の異ったものが見られるのである。

閉 閉 想 想 額 額 肩 肩

喉 喉

(完全付訓)——(部分付訓又は無訓)

3 四部七五函43号

1才1 釋迦如来念誦次第

- 2 先普礼 對 本尊前 端身正
- 3 流 金剛合掌 閉目運 心想 對 本
- 4 尊并 曼荼羅海會聖衆 五鉢
- 5 投地恭敬 作礼 真言曰

(陀羅尼二行略)

1ウ1 次着座 次塗香

2 以白檀香等塗 兩手腕臂等

3 想 磨 五分法身

4 次淨三業 蓮華合掌 印

5 處 五處者 先額 次右肩 即誦

前 前 運 運 想 想 并 并

投 投 作 作 塗 塗 肩 肩

(部分付訓)——(無訓)

對 對 白檀香 白檀香 印 印

兩手腕臂等 兩手腕臂等

(無訓)——(完全付訓)

心——心、者——者

(部分付訓)——(部分付訓)

磨瑩——磨瑩

以上、同一箇所の仮名訓の相違点に着目すると、28号の仮名訓がより詳密である。一漢字に完全な形で訓が多く、完全訓でなくとも部分訓が多いのに対して、43号の仮名訓は助辞や活用部分等を示すと言った謂わば一漢字に不完全な部分訓や無訓が多いことが窺われるのである。冒頭の十行程度の仮名訓からも両本の一つの傾向が推察されるのである。

次に、本書中の「地結」の項目を見てみよう。

28号 10ウ 1 次地結 先以右中指入左頭中

2 指間右无名指入左名小指間皆

3 頭外出以左中指綴右中右中指

4 背以左无名指綴右無明指背

5 入右名小指間二小頭指各頭相跂

二

6 大指下相捻即成結此印如金剛形

7 如金剛杵形以二大指向地触之誦

8 真言一遍印於地如是至三即成

11オ 1 堅固金剛座真言曰

この項目でも両本はほぼ同様な訓読が行われていることが窺われるが、この十行程の仮名訓には先掲の冒頭部分では見られなかった傾向、即ち仮名訓そのものの相違(異訓)が次掲の如く見られるのである。

(実詞訓の相違)

綴——綴 綴——綴 下——下

(助詞の相違)

背——背 背——背

又、同一の仮名訓ながら活用語の活用部分が28号が命令形で示され、43号が連用形等で示されている相違も見られる。

43号 4 次地結 先以右中指入左

5 頭中指間右无名指入左名小指

12オ 6 間皆頭外出以左中指綴右中

7 指背以左无名指綴右无名指

12ウ 1 背入右名小指間二小二頭指

2 各頭相跂二大指下相捻即成

3 結此印已想印如金剛杵形以

4 二大指向地触之誦真言一遍

5 印於地如是至三即成堅固

6 金剛座真言曰

特に命令形で示すかどうかは、本書が作法・次第等を記した書であるところから、28号と43号の訓読の性格を判断するひとつの視点ともなり得よう。

冒頭部分でも窺われた28号の付訓が完全訓等の詳密な付訓形態が多いのに対して、43号が少し簡素なものが多いという傾向はこの「地結」の項でも同様であることがわかる。

(完全付訓) — (完全付訓)

頭 頭 間 間 趾 趾 捻 捻

両本共に同訓の完全訓は右の4語のみであり、次に掲げる訓の多くが28号の方が丁寧に加点されていることがわかるのである。

(完全付訓) — (部分付訓又は無訓)

皆 皆 外 外 背 背 入 入  
相趾 相趾 至 至 三 三

(部分付訓) — (実詞訓が無訓)

印 印 如是 如是 形 形

(助詞を付訓) — (助詞が無訓)

頭 頭 以 以 以 以 間 間  
左中指 左中指 中指背 中指背  
金剛杵形 金剛杵形

但し、43号の方が28号よりも丁寧な付訓も次の例の如く少し見られる。

(部分付訓) — (完全付訓)

相捻 相捻 向 向 成 成 各 各

(無訓) — (部分付訓)

成 成 結 結 想 想 即 即

此 此

(助詞が無訓) — (助詞を付訓)

右無名指 右無名指 印 印

以上、本書の冒頭と「地結」の項の各十行程度の同一箇所に見られる付訓状況を検証した。両本の訓読は基本的には共通のものであり、故に同一訓読の為に同一訓が多く存していた。両本は、高山寺に於いて緊密な関連のある本として、今後更に別視点からも検討してみたい。両本の仮名訓は相違点を視点とすると次の二傾向にまとめられよう。

(1) 同一箇所同一訓が加点されていても、完全に表記形態まで一致する同一の完全訓はむしろ少ない。微妙に相違している訓の方が多い。それは、28号の方がより丁寧で詳密な訓の形が見られるのに対して、43号の同一箇所は簡素な形の訓が存している。28号の完全訓に対して43号は不完全な部分訓や

(2) 異訓の存在があること。即ち、実詞訓そのものが相違していたり、活用語の活用語尾の相違や助詞等の相違等は、同一箇所における訓読法の相違となつて反映している。

## 二 仮名訓の表記法の差

兩本の仮名訓を比較して、著しい特色として、(1)28号の方が丁寧な付訓傾向にあるらしい事が予想された。本項では以下この傾向が全体的に検証しても同様であるかどうかを見ていく。

〔詞の訓〕

## イ、名詞訓

[illegible]

各	此
各	此
形	此
形	此
我	此
我	此
右手	各
右手	各

宮殿<sup>テム</sup>——宮殿  
俱脰<sup>テイノ</sup>——俱脰  
火炎<sup>エンヲ</sup>——火炎<sup>ヲ</sup>

乳水ニウヲ——乳水ヲ  
三鈷コノ——三鈷  
白檀香タムカウ——白檀香

金剛拳クエムニ——金剛拳ニ  
法驗早速ケムサウソクニ——法驗早速ニ

金剛光焰ニムノ——金剛光焰  
 嚙字ラム——嚙字

上ヲ  
上  
上  
心  
心

各ノ各ノ  
各ノ各ノ  
中ノ中ノ

三度——二度<sub>ト</sub>

以上のとおり、名詞訓に於ける付訓状況の差は28号に仮名訓が多いことが明確に判明する。43号にのみ見られる仮名訓の例はかなり少ない。又、以下に掲げる様な二字熟語、三字熟語、四字熟語も28号には

等の如く語分割で訓読する傾向も見られる。

□, □, |, □, □

両手——両手 左肩——左肩 上<sup>ノ</sup>節——上<sup>ノ</sup>節  
 身<sup>ノ</sup>前——身<sup>ノ</sup>前 土<sup>ノ</sup>中——土<sup>ノ</sup>中 右<sup>ノ</sup>手——右<sup>ノ</sup>手  
 左手——左手 杵<sup>ノ</sup>形——杵<sup>ノ</sup>形 右<sup>ノ</sup>膝——右<sup>ノ</sup>膝  
 諸尊像——諸尊像 本尊像——本尊像  
 々々(楼閣)中——々々(楼閣)中  
 観念力——観念力 供養物——供養物  
 供養具——供養具  
 三<sup>ノ</sup>鉢<sup>ノ</sup>杵<sup>ノ</sup>形——三<sup>ノ</sup>鉢<sup>ノ</sup>杵<sup>ノ</sup>形 両<sup>ノ</sup>手<sup>ノ</sup>腕<sup>ノ</sup>臂<sup>ノ</sup>等——両<sup>ノ</sup>手<sup>ノ</sup>腕<sup>ノ</sup>臂<sup>ノ</sup>等  
 これら熟語を分割して□、□として訓読する場合とそうでない場合  
 合とでは受ける意味のニュアンスに大きな差が生じる。因みに天  
 理大学現蔵の仮名書き本はすべて□、□の形で統一されている。  
 ○フタツノテ ヒタリノカタ カミノフシ シンノマヘ  
 トノナカ ミキノテ ヒタリノテ シヨノカタチ  
 ミキノヒサ  
 ○シヨソソノサウ ホソソノナカ ロウカクノナカ  
 クワンネソノチカラ クヤウノモノ クヤウノク  
 ○サンコシヨノカタチ フタツノ・テ・ウテ・ヒチ・トウ

□、□型は43号にも少例見られるので、仮名書き本が28号のみと  
 関連するとは思われない。全文仮名のみによって記されている仮  
 名書き本に統一して示される□、□型は漢語の熟語の明瞭な意味を  
 伝達するには有効な訓法であろう。28号は豊富な仮名訓の付訓や  
 これらの熟語の分割付訓などで43号とは少し異なる性格を持つこ  
 とが窺えよう。

#### ロ、動詞訓

名詞訓同様、動詞訓も28号は詳密な付訓の行われていることが  
 判明する。而も次例の如く訓読を補強する訓み添え語も見られる  
 ようである。

#### (訓み添え)——(無訓)

威光<sup>アリ</sup>——威光 香雲<sup>アリ</sup>——香雲

#### (完全訓)——(無訓)

作<sup>オセ</sup>——作 入<sup>イレヨ</sup>——入 収<sup>オサメヨ</sup>——収  
 開<sup>ヒライテ</sup>——開 及<sup>アサヘテ</sup>——及 得<sup>ウケテ</sup>——得 由<sup>ユルカ</sup>——由  
 在<sup>アテ</sup>——在 着<sup>ツケテ</sup>——着 成<sup>ナル</sup>——成 作<sup>ツクテ</sup>——作  
 旋<sup>マワシメ</sup>——旋 着<sup>ツケテ</sup>——着 成<sup>ナル</sup>——成 以<sup>モテ</sup>——以

#### (完全訓)——(無訓十テ)

運<sup>ハコンテ</sup>——運 投<sup>ナケテ</sup>——投 想<sup>オモヒテ</sup>——想 塗<sup>ヌテ</sup>——塗  
 開<sup>ヒライテ</sup>——開 来<sup>キタテ</sup>——来 舒<sup>ノヘテ</sup>——舒 塗<sup>ヌテ</sup>——塗

(完全訓) — (無訓+コト)  
得<sup>ウル</sup>—得<sup>コト</sup>

(完全訓) — (部分訓)

散<sup>サン</sup>—散<sup>セヨ</sup> 捻<sup>チツ</sup>—捻<sup>セヨ</sup> 想<sup>ソモ</sup>—想<sup>ヘ</sup> 樂<sup>ネカ</sup>—樂<sup>ハ</sup>  
奉<sup>タマフ</sup>—奉<sup>マツル</sup> 及<sup>フ</sup>—及<sup>ヒ</sup> 隣近<sup>リンコン</sup>—隣近<sup>スルコト</sup>  
洗除<sup>センショ</sup>—洗除<sup>ス</sup> 洗淨<sup>センヤウ</sup>—洗淨<sup>ス</sup>

28号の完全付訓の箇所に対応する43号のそれは、無訓か又は活用部分のみを示したり連用形や連体形であることを示す動詞のテや名詞のコトを示すに止まっている。28号が仮名訓によって字音訓を示すのに対して、43号は音合符によってそれを示す「洗—淨」例等も見られ、仮名訓の状況はかなり異っている。

次に28号の動詞の部分訓を43号と対応させてみると、43号はその大半が無訓であることがわかる。

(部分訓) — (部分訓)

驚覚<sup>キヤウ</sup>—驚覚<sup>スルニ</sup> 驚覚<sup>スルニ</sup>—驚覚<sup>スルニ</sup> 焼淨<sup>セウ</sup>—焼淨<sup>ス</sup>  
返<sup>シテ</sup>—返<sup>テ</sup>

(部分訓) — (無訓)

對<sup>シテ</sup>—對<sup>セヨ</sup> 印<sup>シテ</sup>—印<sup>セヨ</sup> 誦<sup>シテ</sup>—誦<sup>セヨ</sup>  
誦<sup>シテ</sup>—誦<sup>セヨ</sup> 誦<sup>シテ</sup>—誦<sup>セヨ</sup> 誦<sup>シテ</sup>—誦<sup>セヨ</sup>  
誦<sup>シテ</sup>—誦<sup>セヨ</sup> 誦<sup>シテ</sup>—誦<sup>セヨ</sup> 誦<sup>シテ</sup>—誦<sup>セヨ</sup>

安<sup>シテ</sup>—安<sup>セヨ</sup> 散<sup>セヨ</sup>—散<sup>セヨ</sup> 安<sup>シテ</sup>—安<sup>セヨ</sup> 安<sup>シテ</sup>—安<sup>セヨ</sup>  
起<sup>シテ</sup>—起<sup>セヨ</sup> 觀<sup>シテ</sup>—觀<sup>セヨ</sup> 印<sup>セヨ</sup>—印<sup>セヨ</sup> 印<sup>セヨ</sup>—印<sup>セヨ</sup>  
獲得<sup>セ</sup>—獲得<sup>セ</sup> 合掌<sup>シテ</sup>—合掌<sup>セ</sup> 六指<sup>シ</sup>—六指<sup>セ</sup>  
證得<sup>セ</sup>—證得<sup>セ</sup> 觀行力<sup>スルラ</sup>—觀行力<sup>セ</sup> 不染着<sup>セ</sup>—不染着<sup>セ</sup>  
圍繞<sup>セリ</sup>—圍繞<sup>セリ</sup> 周迴<sup>シテ</sup>—周迴<sup>セ</sup> 加持<sup>スルニ</sup>—加持<sup>スルニ</sup>  
三通<sup>スルニ</sup>—三通<sup>スルニ</sup> 三通<sup>スルニ</sup>—三通<sup>スルニ</sup> 成就<sup>スルコト</sup>—成就<sup>スルコト</sup>  
二十一遍<sup>セヨ</sup>—二十一遍<sup>セヨ</sup> 二十一遍<sup>セヨ</sup>—二十一遍<sup>セヨ</sup>  
加持護念<sup>シテ</sup>—加持護念<sup>セ</sup> 慈心愍念<sup>スル</sup>—慈心愍念<sup>セ</sup>  
結印<sup>ヒッ</sup>—結印<sup>セ</sup> 返<sup>シテ</sup>—返<sup>セ</sup> 曰<sup>ハ</sup>—曰<sup>ハ</sup> 曰<sup>ハ</sup>—曰<sup>ハ</sup>  
想<sup>ヘ</sup>—想<sup>セ</sup> 結<sup>ヒ</sup>—結<sup>ヒ</sup> 結<sup>ヒ</sup>—結<sup>ヒ</sup> 結<sup>ヒ</sup>—結<sup>ヒ</sup>  
結<sup>ヒ</sup>—結<sup>ヒ</sup> 結<sup>ヒ</sup>—結<sup>ヒ</sup> 結<sup>ヒ</sup>—結<sup>ヒ</sup> 證<sup>シ</sup>—證<sup>セ</sup>  
成<sup>ル</sup>—成<sup>ル</sup> 成<sup>ル</sup>—成<sup>ル</sup> 成<sup>ル</sup>—成<sup>ル</sup> 想<sup>ヘ</sup>—想<sup>セ</sup>  
捻<sup>セヨ</sup>—捻<sup>セヨ</sup>

動詞の活用部分に仮名を付す28号に対して、43号は右掲の如くなり大量に無訓となる傾向が顕著である。しかし、少例ではあるが次掲の様に43号に仮名訓が詳しい例も見られる場合も存している。

(無訓) — (完全訓)

以<sup>ミテ</sup>—以<sup>ミテ</sup> 以<sup>ミテ</sup>—以<sup>ミテ</sup> 以<sup>ミテ</sup>—以<sup>ミテ</sup> 以<sup>ミテ</sup>—以<sup>ミテ</sup>

舒テ——舒ヘテ

(部分訓)——(完全訓)

屈シテ——屈クシテ 灌ソ、カム灑ソ、カム 灌ソ、カム灑ソ、カム 旋シテ轉センテムシテ——旋シテ轉センテムシテ

(無訓)——(部分訓)

有リ——有リ 結ヒ——結ヒ 由ルカ——由ルカ 由ルカ——由ルカ 誦シテ——誦シテ 不スシテ散セ——不スシテ散セ

成就スルコトヲ——成就スルコトヲ

以上動詞の仮名訓を検証した。28号に多い仮名訓は名詞訓で見られた傾向と一致するものである。両本の仮名訓の有無は右掲の如く顕著な対応として把握できるが、訓読法そのものに両本の相違はほとんど見られず、訓法は基本的に同一方法で行われていたことは両本の密接な関係を示唆している。

ハ、形容詞訓

左直ヘナラフ——左直シテ

28号が形容詞訓の所を43号は動詞訓とした一例が対応している。

ニ、副詞訓

28号が仮名訓を丁寧に付しており、その逆の例は見当たらない。

(完全訓)——(部分訓)

速スミヤカニ——速ニ 遍フヘナク——遍フヘナク 悉コトクナク——悉コトクナク 皆ミナ——皆ミナ 先マツ——先マツ 若モシハ——若モシハ 設タトヒ——設タトヒ

(完全訓)——(無訓)

皆ミナ——皆ミナ 皆ミナ——皆ミナ 皆ミナ——皆ミナ

ホ、接統詞訓

ここでも28号の仮名訓が詳密である。

(完全訓)——(部分訓)

故ユヰ——故ユヰ 并ナラヒニ——并ナラヒニ 并ナラヒニ——并ナラヒニ

(完全訓)——(無訓)

亦マデ——亦マデ 即スナハチ——即スナハチ

(部分訓)——(無訓)

及ヒ——及ヒ 及ヒ——及ヒ 即チ——即チ 即チ——即チ

(無訓)——(部分訓)

及ヒ——及ヒ 及ヒ——及ヒ

〔接辞の訓〕

へ、接頭語の訓

他の品詞の仮名訓同様、接頭語「相」は28号に付訓例が多い。

相アヒコラシテ釣シテ——相アヒコラシテ釣シテ 相アヒアサヘテ及アサヘテ——相アヒアサヘテ及アサヘテ 相アヒサヘテ駐サヘテ——相アヒサヘテ駐サヘテ

相サツモヨ捻アヒサツセヨ——相サツモヨ捻アヒサツセヨ

〔付属語の訓〕

ト、助動詞訓

(訓み添え訓)——(無訓)



等<sup>ナリ</sup>——等 涅槃<sup>ナリ</sup>——涅槃

28号には助動詞「ナリ」を右掲の如く補読した例が見られる。

(部分訓)——(無訓)

如<sup>クセヨ</sup>——如<sup>セヨ</sup> 如<sup>クセヨ</sup>——如<sup>セヨ</sup> 如<sup>クセヨ</sup>——如<sup>セヨ</sup> 如<sup>クセヨ</sup>——如<sup>セヨ</sup>

如<sup>クセヨ</sup>——如<sup>セヨ</sup> 如<sup>クセヨ</sup>——如<sup>セヨ</sup> 如<sup>クセヨ</sup>——如<sup>セヨ</sup> 如<sup>クセヨ</sup>——如<sup>セヨ</sup>

(無訓)——(部分訓)

如<sup>セヨ</sup>——如<sup>クセヨ</sup>

右のゴトシも実詞訓の傾向と一致し、28号の方が付訓状況が詳

密である。

チ、助詞訓

助詞の仮名訓は訓み添え語として付訓されるが、漢文の本文にルビとして付訓されているものも見られる。

三昧耶之<sup>ミ</sup>——三摩耶之<sup>ミ</sup> 從<sup>ヨリ</sup>——從<sup>ヨリ</sup> 角從<sup>ツノヨリ</sup>——角從<sup>ツノヨリ</sup>

以下、同一箇所<sup>ニ</sup>に助詞訓が加<sup>フ</sup>点<sup>ツ</sup>されて<sup>ル</sup>いるかどうかを検証してみると、右掲の実詞訓や助動詞の傾向、即ち28号の仮名訓が多いというものに、すべての助詞が一致するとは限らないようである。助詞「ノ・テ」等は明らかに28号の付訓例が多いが、他の助詞はそう明確な傾向は指摘できないようである。

(テ)——(無訓)

由<sup>テ</sup>——由<sup>テ</sup> 由<sup>テ</sup>——由<sup>テ</sup> 已<sup>テ</sup>——已<sup>テ</sup> 堅<sup>ダテ</sup>——堅<sup>ダテ</sup>

已<sup>テ</sup>——已<sup>テ</sup> 以<sup>テ</sup>——以<sup>テ</sup> 側<sup>ソメテ</sup>——側<sup>ソメテ</sup> 置<sup>テ</sup>——置<sup>テ</sup>

(無訓)——(テ)

消滅<sup>シ</sup>——消滅<sup>シテ</sup> 去<sup>テ</sup>——去<sup>テ</sup> 離<sup>レ</sup>——離<sup>レテ</sup> 開<sup>ヒラキ</sup>——開<sup>ヒラキ</sup>

開<sup>ヒライテ</sup>——誦<sup>テ</sup> 誦<sup>テ</sup>——誦<sup>テ</sup> 尚、次の例は28号が助詞「テ」であるかどうか判断がつかない。

當<sup>テ</sup>——當<sup>テ</sup> 當<sup>テ</sup>——當<sup>テ</sup>

(ト)——(無訓)

大曼荼羅<sup>ト</sup>——大曼荼羅<sup>ト</sup>

(無訓)——(ト)

流出<sup>ス</sup>——流出<sup>スト</sup> 如<sup>シ</sup>——如<sup>シト</sup> 流出<sup>ス</sup>——流出<sup>スト</sup>

(無訓)——(トハ)

五處者<sup>トハ</sup>——五處者<sup>トハ</sup>

(ニ)——(無訓)

次<sup>ニ</sup>——次<sup>ニ</sup> 次<sup>ニ</sup>——次<sup>ニ</sup> 右<sup>ニ</sup>——右<sup>ニ</sup>

(無訓)——(ニ)

已<sup>ニ</sup>——已<sup>ニ</sup> 纔<sup>ワツカ</sup>——纔<sup>ワツカニ</sup> 内<sup>ウチ</sup>——内<sup>ニ</sup>

檀上大地——檀上大地

(無訓)——(ニシテ)

真實<sup>ニシテ</sup>——真實<sup>ニシテ</sup> 咲怒<sup>ニシテ</sup>——咲怒<sup>ニシテ</sup>

(ノ) — (無訓)

三昧耶之 — 三摩耶之 下 — 下 頂 — 頂

蓮華部 — 蓮華部 左 — 左 左 — 左

無量 — 無量 諾 — 諾 諸 — 諸 諸 — 諸

東北 — 東北 先 — 先 地界 — 地界 諸 — 諸

真言 — 真言 廣大 — 廣大 自身 — 自身

金剛界 — 金剛界 諸尊 — 諸尊 諸佛 — 諸佛

莊嚴 — 莊嚴 廣大 — 廣大 尊 — 尊

前 — 前 三有 — 三有

(無訓) — (ノ)

一切 — 一切 諸佛 — 諸佛 十方 — 十方

真實 — 真實 毗盧遮那 — 毗盧遮那

(ハ) — (無訓)

因果 — 因果 印 — 印

(無訓) — (ハ)

界 — 界

(モ) — (無訓)

惡人 — 惡人 業障 — 業障

(無訓) — (ヨリ)

從 — 從

(ヲ) — (無訓)

印 — 印 人 — 人 印 — 印 像 — 像

百八遍 — 百八遍 百八遍 — 百八遍 以印 — 以印

圓滿 — 圓滿

(無訓) — (ヲ)

印 — 印 垢 — 垢 障碍 — 障碍 帶 — 帶

四處 — 四處 赤金 — 赤金

同一漢字に訓があるかどうか、又その訓は完全訓か部分訓とい

う検証の結果、28号の全般に渡って付訓状況は43号よりもかなり

丁寧で詳密であることが判明した。両本の訓の傾向を把握できた

事は、二本の持つ特質の一つが把握出来たわけであるが、この視

点のみでは訓そのものの特質には十分に迫り得てないので、次項

では別の視点から両本の仮名訓を検証してみよう。

### 三 異訓について

仮名訓そのものの相違、即ち異訓について記述してみる。実詞

訓の相異、又助辞の相違などは両本の性格を訓読法の視点から把

握することにならう。又、仮名書本との本文比較によって漢

文体のどちらがより関連があるか判断の材料ともなるであらう。

### 〔詞の異訓〕

(和訓) — (字音訓)

屈<sup>カ、メテ</sup> — 屈<sup>シテ</sup> 屈<sup>カ、メテ</sup> — 屈<sup>シテ</sup> 勵<sup>ヘケマシテ</sup> — 勵<sup>シテ</sup> 着<sup>ツケテ</sup>地<sup>シテ</sup> — 着<sup>シテ</sup>

成<sup>ナル</sup> — 成<sup>ス</sup> (4例・(シヤウ)ス) 左<sup>ヘナツク</sup>直<sup>シテ</sup> — 左<sup>シテ</sup>直<sup>シテ</sup>

(字音訓) — (和訓)

順<sup>シ</sup> — 順<sup>シ</sup> 奉<sup>フ</sup>送<sup>ソウス</sup> — 奉<sup>タテマツルトツクリ</sup>送<sup>タテマツルトツクリ</sup>

これから28号の方が和訓的な傾向を持っていそうである。両本には、次のような和訓そのものの相違も見られる。

(和訓) — (和訓)

繳<sup>クメ</sup> — 繳<sup>マツヘ</sup> 繳<sup>クメ</sup> — 繳<sup>マツヘ</sup> 下<sup>シモノ</sup> — 下<sup>タタシテ</sup> 宜<sup>フマツケ</sup> — 宜<sup>フマタテ</sup>

又、以下の如き品詞を異にした訓も少例ながら存している。

(体言) — (動詞)

合<sup>ツ</sup>掌<sup>シテ</sup> — 合<sup>シテ</sup>掌<sup>シテ</sup>

(助詞) — (動詞)

從<sup>ヨリ</sup>印<sup>フ</sup> — 從<sup>フ</sup>印<sup>フ</sup>

(動詞) — (補助動詞)

見<sup>ミ</sup>諸<sup>ツレ</sup>佛<sup>フツ</sup> — 見<sup>ツレ</sup>諸<sup>フツ</sup>佛<sup>フツ</sup>

右掲最後の補助動詞の「見」は「見<sup>ツレ</sup>」の活用語尾のみの表記であらう。この待遇表現に関わる例は本書には他にも少例見られる。

足<sup>ミアシ</sup> — 足<sup>ミアシ</sup> 来<sup>タリタマフ</sup> — 来<sup>タマフ</sup> 奉<sup>フ</sup>送<sup>ソウス</sup> — 奉<sup>タテマツルトツクリ</sup>送<sup>タテマツルトツクリ</sup>

43号全てに敬語が使用されていることが注目される。43号は仮名訓の詳密さに欠ける傾向があるが、敬語に関わる訓法を28号よりも多く見せている点は、加点点者の訓読姿勢の反映であらうか。

次に本書が作法・次第を記したもの故、文末部が命令形となっているものが多い。命令形の使用も加点点者の訓読姿勢を示したものと理解される。両本共に多いが28号の方がその傾向が少し強いようである。

(非命令形) — (命令形)

如<sup>クシテ</sup> — 如<sup>クセヨ</sup> 灑<sup>ソクニ</sup> — 灑<sup>ソクニ</sup> 舉<sup>アケテ</sup> — 舉<sup>アケテ</sup> 如<sup>クス</sup> — 如<sup>セヨ</sup>

加<sup>スルニ</sup>持<sup>セヨ</sup> — 加<sup>セヨ</sup>持<sup>セヨ</sup> 旋<sup>メクラセハ</sup> — 旋<sup>セ</sup> 於<sup>テ</sup> — 於<sup>ツケ</sup> 轉<sup>シテ</sup> — 轉<sup>シテ</sup>

轉<sup>セヨ</sup> — 合<sup>セテ</sup>合<sup>アハセヨ</sup> 着<sup>ツケテ</sup> — 着<sup>ツケテ</sup> 旋<sup>シテ</sup> — 旋<sup>メクラセ</sup>

(命令形) — (非命令形)

附<sup>ツケテ</sup> — 附<sup>ツケテ</sup> 及<sup>アサヘテ</sup> — 及<sup>アサヘテ</sup> 柱<sup>サヘ</sup> — 柱<sup>サヘ</sup> 来<sup>キタリタマヘ</sup> — 来<sup>タマフ</sup>

結<sup>ヘ</sup> — 結<sup>テ</sup> 用<sup>ヨ</sup> — 用<sup>ル</sup> 相<sup>アヒサヘ</sup>柱<sup>ヘ</sup> — 相<sup>アヒサヘ</sup>柱<sup>ヘ</sup> 入<sup>ヨ</sup> — 入<sup>ア</sup>

入<sup>ヨ</sup> — 入<sup>テ</sup> 出<sup>イタセ</sup> — 出<sup>シテ</sup> 觸<sup>フレヨ</sup> — 觸<sup>フレテ</sup> 握<sup>ニキレ</sup> — 握<sup>ニキル</sup>

相<sup>アヒツケテ</sup>着<sup>ヨ</sup> — 相<sup>アヒツケテ</sup>着<sup>ヨ</sup> 向<sup>ヘヨ</sup> — 向<sup>ヘテ</sup> 開<sup>ヒラケ</sup> — 開<sup>ヒライテ</sup> 堅<sup>タテヨ</sup> — 堅<sup>タテヨ</sup>

摩<sup>ナツ</sup> — 摩<sup>ナツ</sup> 如<sup>クセヨ</sup> — 如<sup>クシテ</sup> 用<sup>モチキヨ</sup> — 用<sup>モチキル</sup> 博<sup>ヒロク</sup> — 博<sup>ヒロク</sup>

訓読法の差に関わって活用形の相違するものも次掲の如くにあ

る。

微<sup>スロシキ</sup>——微<sup>スロシ</sup> 三轉<sup>スルニ</sup>——三轉<sup>シテ</sup> 應觀<sup>ヘシ</sup>——想<sup>ス</sup>——應觀<sup>シ</sup>——想<sup>スルコト</sup>

加持<sup>スルニ</sup>——加持<sup>スレハ</sup> 焚燒<sup>ホシセウ</sup>——焚燒<sup>スルニ</sup> 盡<sup>ツクス</sup>——盡<sup>ス</sup> 雨<sup>スル</sup>

雨<sup>スレテ</sup> 至<sup>イタル</sup>——至<sup>テ</sup>

これらの活用差の特徴は残念ながら用例が少く判断し難い。又、次掲の如く再読字の訓法の相違も見られる。28号が再読した訓法を示している。

(再読)——(再読の訓なし)

將<sup>マサニ</sup>——將<sup>ニ</sup> 令<sup>シテ</sup>——令<sup>シテ</sup> 令<sup>シテ</sup>——令<sup>メテ</sup>

(再読訓なし)——(再読訓なし)

應觀<sup>ヘシ</sup>——想<sup>ス</sup> 應觀<sup>ヘシ</sup>——想<sup>スルコト</sup>

これに対して43号がそういう訓法を示していないのは、43号が付訓方法に少し粗い傾向があり、28号のように丁寧で詳密な付訓を行わない為に再読表記が見られない為なのか、或は43号の訓法には元来再読用法がなかった為であるのか、現時点で断言は出来ない。

### 〔辞の異訓〕

助動詞が一方に添加されたり、異った助詞の使用例は、以下の如く存在する。

(助動詞の添加)——(助動詞なし)

獲得<sup>セシム</sup>——獲得<sup>ス</sup>

(助動詞なし)——(助動詞の添加)

獲得<sup>ス</sup>——獲得<sup>セシム</sup> 拳<sup>アフル</sup>——拳<sup>アケン</sup> 踏<sup>フム</sup>——踏<sup>フマリ</sup>

圍繞<sup>シテ</sup>——圍繞<sup>セリ</sup>

助動詞を活用語尾に添加しているのは43号の方に多いようである。助動詞の添加は動詞の単独使用よりも一層微妙な表現が可能であり、敬語表現も多く行っていたことと相俟って43号の共通の特色と言えようか、注目したい。

(テ)

至<sup>イタルマデ</sup>——至<sup>テ</sup> 至<sup>イタル</sup>——至<sup>テ</sup> 施<sup>ホトコスニ</sup>——施<sup>ニトコシテ</sup>

(トシテ)

赫<sup>タルコト</sup>——赫<sup>トシテ</sup>

(トラ)

佑<sup>ト</sup>——佑<sup>ト</sup>

(ニ)

中<sup>ニ</sup>——中<sup>ニ</sup>

(ニシテ)

誦<sup>シテ</sup>——誦<sup>ニシテ</sup>

(ノ)

之<sup>ノ</sup>——之<sup>ノ</sup> 四處<sup>ノ</sup>——四處<sup>ノ</sup>

(ヲ)

文——文

背——背

頭——頭

輪壇——輪壇

大曼荼羅——大曼荼羅

大曼荼羅

大結界——大結界

大結界

身——身

身

助詞の使用が異なることは訓法の差になって表われる。用例が少いので断定は出来ないが両本には「ニ—ヲ」「ト—ヲ」の使用傾向がそれぞれにあることをも推則させる。

以上、両本に存する異訓を見て来た。28号と43号の多くの仮名訓は完全付訓か部分付訓の差はあるものの、同一語が多く、右に掲げたものが異訓として存在するものの全てである。仮名訓全般からみると少ない。これらと仮名書き本との比較は、仮名書き本の成立を知る手掛りとして興味ある所であるが紙幅の都合でその比較は別稿に譲ることとする。

この異訓を検討すると語彙的に28号が和訓が多く、43号が字音訓が多いという対応や、訓法的に28号に再読用法が確立しており、43号にはその用法の記載がないという対応、更に43号に助動詞の添加や敬語法の丁寧な使用が多いという傾向が窺われる。これらの対応は今後、他の項目の比較調査を増やすことによって28号と43号の特徴が更に解明された時点で意義を増してくるものである。現時点では両本の新古関係や、祖本との関連などは充分な考

察が出来ないのである。

### 結び

仮名訓を取りあげて、特に相違点に注目して両本の比較を行った結果、28号が仮名訓の付訓に際して丁寧で詳密であり、43号が詳密さに少し欠ける所のある事が判明した。又、同一訓が多い中で異訓も存在し、両本の成立を考えさせる好例ではあるが異訓相互の指摘のみでその関連にまで言及出来なかった。

別稿で両本の仮名字体や仮名遣いの表記面、更には和語と字音語の音韻の状況等の解明を期するものである。そして本稿で記述した仮名訓を逐一仮名書本と比較すること、そこから、高山寺で行われていた漢文文体と仮名文体との交流の実態の一部なりとも明らかにしたいと期している。

### 注

注1 拙稿「高山寺藏釈迦如来念誦次第について」(『東京女子大学

日本文学』第七十八号、一九九二年九月)

注2 2 第四部七五函二八号 一帖

鎌倉中期写、粘葉装柙型、「高山寺」朱印、押界、一紙八行、縦一七・八、横一六・〇、朱点(声点、返点、鎌倉中期)、

墨点(仮名、鎌倉中期)三十丁、

3 第四部七五函四三号 一帖

鎌倉中期写、粘葉装柙型、無印、押界、一紙七行、縦一七・七、横一五・五、朱点(句切、声点、鎌倉中期)、墨点(仮

名、鎌倉中期)、三十七丁、

注3 鎌倉中後期写、粘葉装柶型、「方便智院」朱印、無界、一紙十二行、縦一六・八、横一四・四、朱点(句切り、声点)、三十四丁

注4 高山寺には、明恵の弟子の喜海の撰した和字の記録を隆證が漢訳し、更に高信が加筆した「高山寺明恵上人行状」がある。また、高信が草した仮名書き本を喜海に閲覧に供し、後に同侶の勸進により漢文体に改めた「六大無碍義抄」がある。

〔付記〕 貴重な文献の閲覧については、高山寺、天理大学図書館、京都大学附属図書館御当局の御配慮をいただいた。厚く御礼申し上げます。又、築島裕先生、小林芳規先生はじめ高山寺典籍文書総合調査団の皆様にも多くの御教示を賜った。記して深謝申し上げます。

(かねこ あきら 本学教授)